

地域の魅力を高める歴史的資産の使い方を創造する

37 修景事例を蓄積して想像力を高める

栃木市や桜川市、桐生市の伝建地区の町並みや建造物については、それぞれの地区の形成過程など歴史および社会背景は異なるが、共通する点も多い。いずれも近世初期の町割や地割がよく残されていることや、現存する伝統的建造物が江戸末期から昭和戦前に建てられたもので、その種類や形式などが多様なことがある。その中でも特に土蔵造の見世蔵(主に店舗として使うことを目的とした土蔵造の町屋建造物)や土蔵が存在感を示し、関東地方の在郷町ならではの特徴的な町並みが形成されている。しかし、いずれの地区も伝統的建造物の集積度が比較的低く、戦後の新しい建造物も多く混在しており、西日本に見られるような連続した町並み景観はあまり見られない。したがって、文化財保護の観点から現状の町並みを保存するだけでなく、歴史的遺産を活かしたまちづくりの発想が必要となる。それには伝統的建造物の保存修理にもまして、それらの活用や、新しい建造物の修景がより重要になってくる。しかし、多種多様な建造物を抱えるこれら北関東の重伝建地区においては、修景方法もまた多様である。住民と行政が知恵を絞ってそれぞれの地区にふさわしい修景を模索するしかないのだろう。文献¹⁾の中で、河東義之氏は以上のように述べている。

本研究プロジェクトでは、まちづくりコンペティションや小論文コンクールによる建築系学生や高校生のアイデアも含め様々な活用提案を蓄積してきた。その一つとして、次頁に示すような修景イメージの蓄積も進めてきた。伝統的建造物と現代の建築物が混在する町並みで、如何にして歴史を感じる統一感のある調和した町並みをつくっていくか?という問いに対する答えを導くのは容易では無く、関与者らが議論を重ねることになるだろう。そうした時に、予め修景イメージを蓄積しておき関与者に例示できるようにしておくことで、将来のあり方に関するイマジネーションを高めることが期待できる。蓄積した修景イメージは、平時にはまちづくりの指向性を模索する議論のきっかけとなるツールになり、また災害時は早期に復興を遂げるための青写真となる事前復興の一助として効果を発揮することが期待される。

このような取組みを生徒や学生などの若者だけでなく、建築士などの専門家による更に現実的な事例の蓄積も望まれる。建築士会や建築家協会などの団体がヘリテージマネージャーを中心に組織的に動くことも良いが、組織に縛られることなく、個々の専門家が地域に関心を示し、個人の利害に捉われずに活動が推進されることを期待する。

参考文献

- 1) 河東義之: 北関東の町並み保存とまちづくり、月刊文化財、pp.38-39、2012年7月

現在 → 将来

現在 → 将来

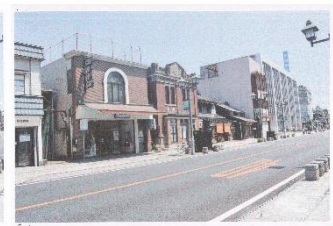
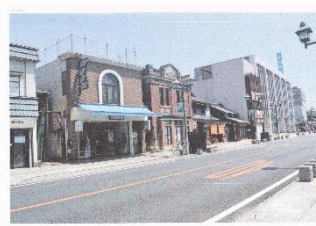
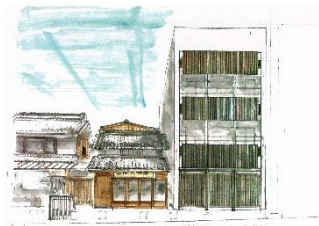


図1 修景イメージ